

3. 哺乳類

選定・評価方法の概要

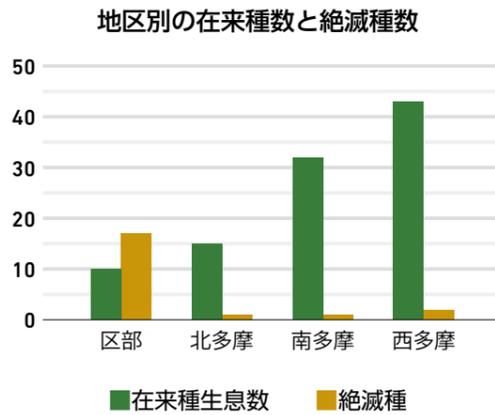
検討対象種は、東京都において明治時代以降に生息記録がある在来の陸生哺乳類 46 種のうち、地域によって絶滅したか絶滅のおそれのある可能性があるもので、今回の検討対象種は、前回（本土部レッドリスト 2010）の 40 種に 3 種を加え、合計 43 種とした。新たに加わった 3 種は、前回以降に生息が確認されたシナノホオヒゲコウモリ、今回の現地調査で確認されたクビワコウモリとカグヤコウモリである。検討対象から除外したのは、いずれの絶滅危惧カテゴリーにも該当しないと考えられたアブラコウモリ、タヌキ、ニホンジカの 3 種である。

絶滅のおそれの評価は、基本的に定量的要件を用いた。ただし、IUCN（2003）による「地域レベルでレッドリスト基準を適用する場合のガイドライン」（Guidelines for Application of IUCN Red List Criteria at Regional Levels, Version 3.0）を参考にして、ある地域の生息状況が絶滅危惧カテゴリーの数値基準に当てはまる場合でも、その地域で増加している、隣接地域に普通に生息するなどの種については、ランクを 1 ないし 2 段階下げて評価した。また、本土部全体としての評価は基本的に、4 地域のなかで絶滅のおそれが最も低いランクで代表させることとした。なお、本解説版（本土部レッドデータブック 2023）の作成時に本土部レッドリスト 2020 におけるニホンカモシカとニホンジネズミのカテゴリーの見直しを行った。

選定・評価結果の概要

評価の結果、いずれかの地域において絶滅またはそのおそれがある種（絶滅（EX）、絶滅危惧ⅠA類（CR）、絶滅危惧ⅠB類（EN）、絶滅危惧Ⅱ類（VU）、情報不足（DD）のいずれかに該当する種）として 34 種、準絶滅危惧（NT）を含めると 40 種が選定された。このほかに留意種としてのみ選定されたものが 2 種（アズマモグラ、アカネズミ）、いずれのカテゴリーにも該当しなかった種がスミスネズミ 1 種であった。なお、近年（概ね 2001 年以降）の生息情報がある在来種（以下、現生種とする）の数は、地域別にみると西多摩（43）、南多摩（32）、北多摩（15）、区部（10）の順に多い（カッコ内は種数）。

区部では現生の 10 種に対して絶滅が 17 種ときわめて多く、かつては低地においても豊かな自然が存在したことが示されている。過去の生息情報は岸田（1934）による昭和初期の調査記録に基づいている（ただし区部におけるシントウトガリネズミの記録は、金子（2012）の見解に従い、誤りと判断した）。北多摩については情報が乏しく、現生の 15 種に対して、生息の可能性はあるが「データ無し」となった種が 15 種と多い。南多摩は高地性の種を欠くものの多くの種が生息するが、準絶滅危惧（NT）、情報不足（DD）まで含めると現生の 32 種中 18 種（56.3%）が何らかのカテゴリーに該当している。西多摩は関東山地にみられるほぼすべての哺乳類が確認されている一方で、絶滅危惧種（EN、VU）が 12 種（現生 43 種の 27.9%）、準絶滅危惧（NT）が 11 種（同 25.6%）、合計で 23 種（同 53.5%）あり、東京都の生物多様性の保全を図る上で重要な地域であることが示されている。なお、高地性のミズラモグラ、ヤチネズミなどは、高標高地の小面積でしか確認されていないが、隣接県に広く分布することを考慮して、直ちに絶滅のおそれが高いとは評価せず、準絶滅危惧（NT）と評価した。なお、北多摩のニホンリスとヒナコウモリはこの地域での生息確認記録はないが、狭山丘陵の埼玉県側に記録があ



ヤチネズミなど生息する林床（奥多摩町）

© 田畑伊織

り、東京都側にも生息する可能性が高いことから、データ無し（-）ではなく DD と評価した。

留意種としては区部のアズマモグラとアカネズミ、西多摩のハタネズミが選定された。区部の 2 種はこの地域にみられる数少ない野生哺乳類であり、現在のところ絶滅のおそれが高いとは言えないが、開発の進行とともに気づかぬうちに広範囲から消失する可能性があり、比較的良好な環境が保たれていることを指標する種としても注目される。杉並区（2013）による調査では、同区内におけるアズマモグラの分布域縮小が指摘されている。西多摩のハタネズミは、この地域に大規模な河川敷など本種の選好する特殊な環境が少なく、今後の動向に注意が必要であることから、留意種に選定した。

前回（本土部レッドリスト 2010）の評価結果と比較すると、ランクが上がったのは南多摩のニホンザル、ニホンリス、西多摩のヤマコウモリ、ニホンウサギコウモリ、テングコウモリなどで、ニホンリスやヤマコウモリのように丘陵地での開発進行や巨木の伐採などが原因で明確な生息状況の悪化がみられたもののほか、コウモリ類など、情報が増加したことから前回より厳密な評価が可能となったものもある。ランクが下がったのは、南多摩と西多摩のツキノワグマで、これは分布域拡大がみられていることと隣接県に広く生息することによる。個体数増加も推測されるが、今後の検証が必要である。

このほか、区部のカヤネズミ、南多摩のコキクガシラコウモリ、ヤマコウモリ、モモジロコウモリなど、前は絶滅（EX）、情報不足（DD）、データ無し（-）と評価された種の中で、新しく情報が得られたことから実態を示すカテゴリーに変更されたものがある。分布域の拡大がみられる北多摩のイノシシも同様である。

前回以降、特にコウモリ類について新しい情報が蓄積され、前回より正確な評価を行うことができたと考えられる。しかし、ニホンジカなど一部の種を除いて、都内における哺乳類の生息現況に関する情報は全般にきわめて乏しく、それは今回の現地調査によってコウモリ類 2 種が都内で新たに確認されたことにも示されている。今後、より正確な評価に向けて、生息状況に関する基礎的、網羅的な調査を行うことが必要である。

絶滅のおそれを高めている要因としては、開発や森林伐採、天然林の人工林化、人工林の管理不足などに伴う生息環境の消失、劣化、断片化、単純化がまず挙げられる。特に南多摩の丘陵地には、東西方向に帯状に走る複数の緑地が残され、野生哺乳類の生息地や東西を繋ぐ回廊としての機能を果たしているが、開発による分断の影響を大きく受けており、保全上の配慮が必要である。また、西多摩、南多摩におけるニホンジカの個体数増加、分布拡大に伴う林床植生の改変や消失なども要因として指摘されている。そのほか、狭山丘陵ではキタリス、町田市、瑞穂町、あきるの市ではクリハラリスの、いずれも特定外来生物に指定されている外来種が確認されており、ニホンリスへの影響が懸念されている。しかし、これらの要因がもたらす影響の詳細については不明なことが多く、調査を行い、必要な対策を検討することも重要な課題である。

（石井 信夫）

引用文献

- 金子之史, 2012. 東京都 23 区における絶滅陸棲哺乳類—岸田久吉 (1934) の検討を中心に—. 香川生物, 39: 19-35.
- 岸田久吉, 1934. 大東京の哺乳動物に就て. Lanzania, 6 (52): 17-30.
- 杉並区, 2015. 杉並区自然環境調査報告書 (第 6 次).

写真提供者

田畑伊織、(有)ゼフィルス



カヤネズミが確認された河川敷（板橋区）（球果は都外）